

奈良県立民俗博物館

1974 年に開館した、民俗学を専門とした博物館です。奈良で生きてきた人々が暮らしていく中で培ってきた生活の知恵が分かる資料を展示しています。現在休館し、より理解を深められる展示へとリニューアルしていきます。

民俗博物館の位置する大和民俗公園では、県内各地から移築し、復原した古民家など 15 棟を公開しています。そのほか、季節の花々や木々などが、訪れる人を楽しませてくれます。



大和民俗公園内の古民家

展覧会期中のイベント

◆奈良県立民俗博物館学芸員によるギャラリートーク

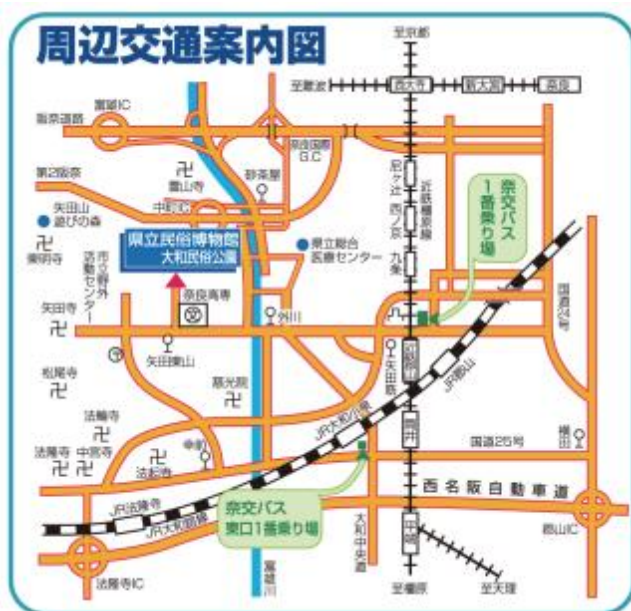
日時：10月5日(日)、10月19日(日)

各日14:00～

会場：奈良県立美術館 1Fギャラリー

講師：高橋史弥(奈良県立民俗博物館 学芸員)

アクセス



■公共交通機関

○近鉄郡山駅 奈良交通バス(1番乗り場)

矢田東山 下車 徒歩10分

○JR大和小泉駅 奈良交通バス(東口1番乗り場)

矢田東山 下車 徒歩10分

■自動車

○第2阪奈道路 中町ICより南へ5km

(無料駐車場有り)

■住所

〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地

TEL:0743-53-3171/FAX:0743-53-3173

ホームページ：<https://www.pref.nara.jp/1508.htm>

※古民家は月曜(月曜祝日の場合は翌平日)を除く9時～16時開館

奈良県立民俗博物館企画 吉野林業の世界

担当：高橋史弥 石橋諒 大熊久貴

吉野林業の世界

二〇二五年九月二三日～二月二六日

先人達の知恵

吉野林業は、林業とその加工業に携わる、いわば職人集団によって維持されてきました。彼らは、長い年月の中で、木を植え、育て、切り出すすべを熟知していました。切り出した木材からは、日用品や信仰に使うものも作りだし、多くの人々との交流を通じた生活をしてきたことでしょう。

吉野の木材が大量に使用されるようになるのは、豊臣秀吉が大阪城や伏見城の建築に着手した頃でした。

吉野の木材の需要が衰えることはなく、酒樽に加工するためのクレと呼ばれる部材作りや、様々な木材加工でできた木片を利用した割箸など、日常生活にも影響を与えてきました。

こうした、吉野の産業で使われた「吉野林業用具と林産加工用具」は、そこで暮らした人々の生活や仕事をするうえで得てきた知識を通して、吉野林業の全体像を理解するために極めて重要であるとして、2007年に日本国が重要有形民俗文化財に指定し、保護措置が講じられました。現在は、指定品1908点が奈良県立民俗博物館で保存されています。

今回、奈良県立美術館で開催される、彫刻家の安藤榮作氏の展示にあわせ、吉野林業用具と林産加工用具を通じて、「木」を利用した人間生活を伝える展示を試みました。

同じように見える道具でも、今回展示した道具は一点一点、用途にあわせて違っていたり、手作りで繊細に作られていたりする道具です。

我々人類は、道具を作るために様々な方法をとってきました。近年は低価格を実現するために、規格を決めて、速い速度で大量生産によって作り出します。それは、現在の大量消費生活の一つの帰結といえます。ただしこれは、現代がたまたま、平均的な形、あるいは一定の強度で作ったものが便利なことから享受されているにすぎません。

決して、ほとんどが手作りでできている時代の道具が劣っているわけではありません。道具は、その時代の社会の求めに応じて生産され、使用されてきたものでした。我々人類が何を選択し、何を捨ててきたのか、その時代の中の生活の知恵をお伝えします。



森林伐採の様子



割箸



タルマル(樽丸)製作の様子

伐採の主役ノコギリ

林業の主役の一つとしてイメージされるのは、ノコギリでしょう。ノコギリには、その形状に応じた用途があります。形状に応じて、木を切り倒す、または切り出した木材を小さく加工するなど、様々ありました。刃の付き方により、切り方も違いました。刃を均等に並べたものは、木目に沿って平行に切る「縦挽き」のためです。挽く際、刃は木に叩きつけるようなあたり方をして、削られていきます。刃をより鋭くするのは、木目に逆らって直角に切る「横挽き」のためです。繊維を断ち切りながら進まないといけないため、刃は鋭い形状となります。

風習を込めたオノ

オノは先が細くなっていて、より力を伝わりやすくして木を伐採するためのオノ(斧)、刃先が広がっていて、細かい物に対して打突できる部分を広くした、薪割などに使用するマサカリ(鉞)に分けられます。

オノのように、大きな力を使う物は、その使用にあたり危険も伴いました。これを回避するために、神様の力を借りていた考え方も見られます。斧には、刃先からいくつもの線が彫り込まれています。これは実用的なものではなく、山の神に食物を奉納する意味を込めた印です。三本の線が入ったものをミキといい、神酒すなわち神に献するお酒を表し、四本線をヨキといい、食の献饌を表している、と説明している場所もあります。少なくとも、神様に、仕事の安全を祈っていた痕跡をうかがい知ることができます。これこそ、山の神様を畏れ敬わなければ林業をすることはできないという、長年の林業生活の中で身につけられていった生活の知恵の一つといえるでしょう。ホームセンターで売っているオノにも、装飾としてこの痕跡を見ることができます。

天然の香料となった吉野杉

タルマルは、酒樽を作る部材となる木の板「クレ」を詰めたものです。各地の桶屋へ輸送して、クレを酒樽等に加工して使いました。

材料となる杉は樹齢70年以上のものが使われ、80年から90年ものの杉が使われることが一般的でした。

クレは、年輪の細かさや色合いなどから等級で分けられ、上質な内稀、その中でも極めて上質な極稀などの焼き印が捺されました。酒樽にする場合は、酒樽の内側が赤く外側が白くなるような材が使われている物が上等品とされていて、樽自体に価値もつけられました。

吉野杉で作られた酒樽に入れられた酒は、輸送中に杉の良い香りがつくことから、江戸で人気を博しました。クレによって作られた酒樽は、本来輸送道具として作られたものですが、期せずして、天然の香料として、この地域の酒の商品価値を高めていったのです。



ノコギリ



オノ



タルマル